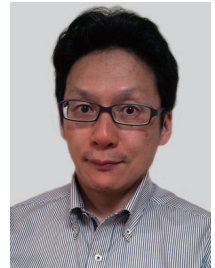


## システム開発論文特集の発行にあたって



システム開発論文特集編集委員会

委員長 山田 武士

研究開発において要素技術や理論の研究とそれらをベースとしたシステムの開発は、本来、車の両輪というべきものである。各要素技術はそれらを組み合わせることで社会の要請に応える実システムとして具現化してこそ、その真価を発揮する。一方で、実システムの構築・運用で蓄積されたノウハウや、利用者からのフィードバックは要素技術や理論の研究にとっても貴重な知見となる。本ソサイエティでは、既存技術の組み合わせであってもイノベーションとして新たな価値を生み出すシステム開発の重要性に焦点を当てるため、システム開発論文というカテゴリーを設けている。システム開発論文は、ソフトウェア・ハードウェアを問わず企業・大学・官公庁研究機関において行われたシステム開発に関する成果をまとめた論文であって、一般論文とは異なる基準で査読している。本ソサイエティでは、このシステム開発論文の認知度向上と投稿数の増加を目指して、2001年、2005年、2010年と過去3回特集号を企画・刊行しており、回を重ねるごとに成果を上げて来ている。そして、今回がその4回目、前回から3年ぶりの企画となる。

前回に引き続いて、編集委員には和文論文誌編集委員会総員があたるという体制を作り、2012年9月に論文募集を開始、翌1月を投稿締め切りと定めた。限られた募集期間にもかかわらず、合計100編の投稿があった。これは、前回の89編を上回る結果であり、予想以上の投稿数に正直、特集幹事団は嬉しい悲鳴をあげた。しかしこれは、過去の特集などを踏まえて、システム開発論文が着実に浸透してきている証であるといえる。総勢190名の査読委員を動員し、1月に第一回査読、3月に第二回査読を行い、最終的にレター1編を

含む50編の論文を採択した。ちなみに、前回は50編の採択（レター4編を含む）であったから、採択率は多少厳しくなり、結果的に前回と同レベルの採択数を確保したことになる。投稿論文の分野は多岐に渡っているが、分野別の投稿件数で見ると、上位から、ソフトウェア工学、情報ネットワーク、ソフトウェアシステム、教育工学などと続き、一般論文と較べてもこれらの比率が高くなっている。一方で、パターン認識、画像認識など、一般論文では件数が多い分野の投稿は比較的少ない（ただし、少ないながらも健闘している）。また、筆頭著者が企業所属である投稿の割合が通常論文と比べて多くなっていることも特徴といえる。

一般に本学会の論文は、「新規性」「有効性」「信頼性」「了解性」の四つの基準で評価される。これは、一般論文でも、システム開発論文でも同じである。ただし、一般論文ではそこで提案されている「手法」や「要素技術」の「新規性」「有効性」が問われるのに対し、システム開発論文ではそこで提案されている「システム」の「新規性」「有効性」が問われることになる。必然的に、用いられている個々の手法や要素技術に新規性がなくても、それらを組み合わせたシステムとしての新規性と有効性がある、それらが信頼できる根拠に基づいて記述されており、読者にとって明快に了解され得る内容であれば採録となる。従って、採録基準に違いはあるものの、システム開発論文が一般論文と比べて決して「採択基準が甘い」わけではない。一般論文と同様、関連するシステム、あるいは技術の調査を十分に行い、その中での開発したシステムの位置付けを明確にすることが求められる。

今回の特集には、世界一への挑戦あり、要素技術の

